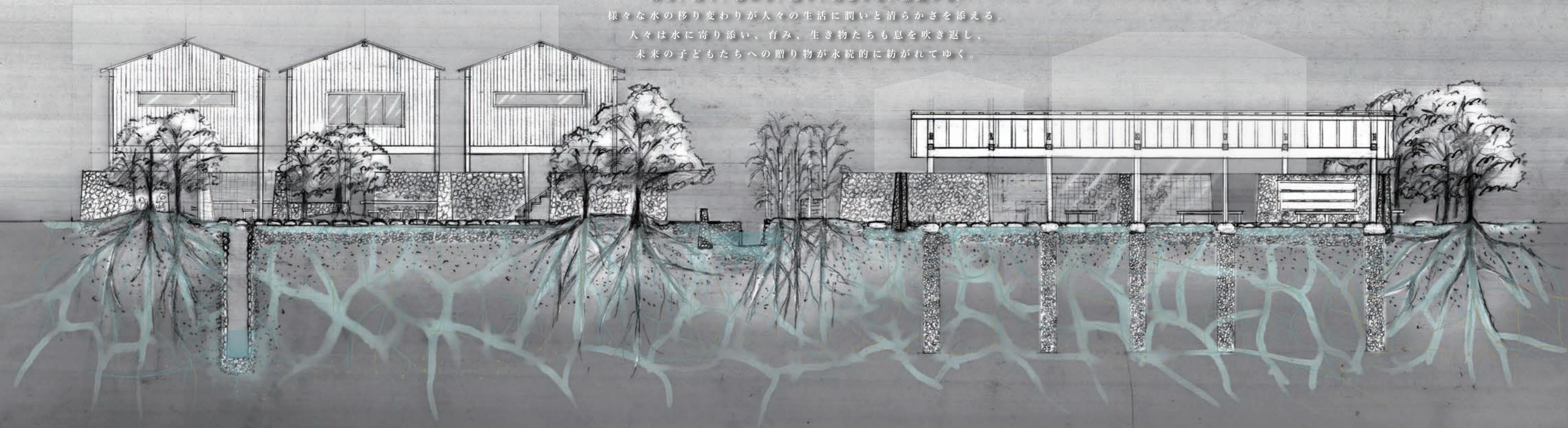


巡る庭

—湧水と人々を紡ぎ育てること—

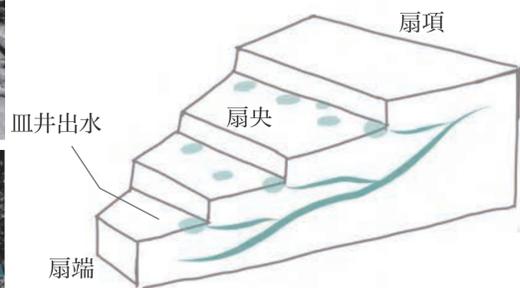
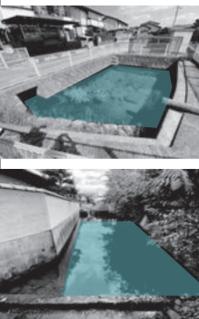
降る、湧く、溜める、流す、浸透する、蒸散する。
 様々な水の移り変わりが人々の生活に潤いと清らかさを添える。
 人々は水に寄り添い、育み、生き物たちも息を吹き返し、
 未来の子どもたちへの贈り物が永続的に紡がれてゆく。



断面図（東西）1：60

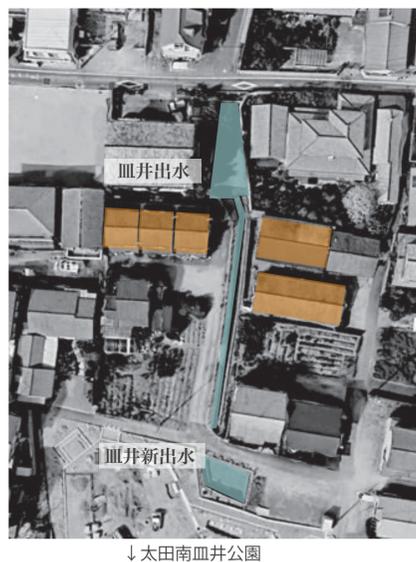
出水の現状

「出水」とは、川の伏流水が地表面に湧き出た水のことである。付近に流れる香東川は、北東方向に開いた扇状地を形成しており太田南地区は扇状地の扇端に位置する。そのため、段差の部分で伏流水が地表面に出やすくなり、出水が多く存在する。皿井・皿井新出水は、灌漑期である夏季には多くの水量を保っている。出水の水は灌漑用として近隣の田を潤す。現在は、香川用水の通水により利用頻度は減少し、壁面はコンクリートで覆われ、出水と人との関わりが希薄になりつつある。古くから人々の生活になくはない存在であった出水だが、宅地化や水不足改善にともない荒廃の一步を辿っている。



周辺環境

敷地のある香川県高松市太田南地区には、「出水」と呼ばれる湧水が約19カ所存在する。そのうちの2つである皿井出水、皿井新出水は水路で繋がれており、水路の両側には空き家となった借家が並んでいる。西側の空き家は2階建てが3棟、東側に平屋が2棟あり、どちらも築50年の木造家屋である。また、北側に小学校、南側に太田南皿井公園があり、子どもが多く行き交いする場所である。



問題点

○出水荒廃による危険

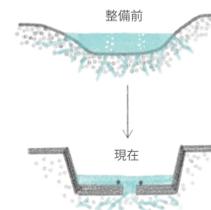
整備される出水がある一方で、利用されなくなった出水は荒廃が進み、草木がうっそうと茂り、人が寄り付くことができない場所となってしまった。近隣の小学生へのアンケートでは「深い」「汚い」「危険」といった印象が強い。

○人々の意識の希薄化

人々のより所であったはずの出水は荒廃が進むにつれて人が寄り付くことも減り、出水の存在が希薄しつつある。人々の出水に対する意識は出水の現存に深く関わるため、再び人々が寄り添える場が必要である。

○舗装による湧水量の変化

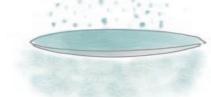
湧水を守りたいという人々の思いで、出水の周辺はコンクリートなどの舗装によって囲われた。しかし、人工的に囲われたことによって地下水が湧き出してくる地表面を塞いでしまっている。そのため、湧出量も減少し、埋め立てられる出水があるのが現状である。



Proposal 1 —全体計画—

○循環する庭

2つの出水を水路で繋いだ南北に長い敷地全体を1つの庭と考え、縦横に巡ることができるプランを創出する。また、平面的な「循環」だけでなく、断面的な水の循環を描き、敷地全体が水の器となる。



○空き家の利活用

かつて、宅地化に伴って建てられた築50年の空き家をすべて解体するのではなく、一部の部材を再利用しながら再構築し、新たな用途で活用する。



○多世代交流の場

周辺環境から、小中学生が多くの行き交う場所であるため、子どもたちを中心として多世代をつなぐ役割を担う。近隣の小学生に実施したアンケートによると、子どもたちにとって「文化・歴史を学べる場所」、「憩いの場」であるため、子どもが育つ場所として計画する。西側の3棟は、『子ども食堂』として食育を、東側の2棟は『図書室』として地域教育を行う場を形成する。

